2023 JUA/EAU Resident Programme 参加報告

楊　井　祥　典（慶應義塾大）

「今世界中が大変なことになっている．EAU2020への参加は中止や」

2020年3月，手術中に大家教授から急遽電話があった．未曾有の感染症，COVID19が全世界を震撼させ海外学会への参加どころではない状況となってしまった．

それから3年の時を経て，世界は徐々に以前の平穏な生活を取り戻しつつある（ロシア，ウクライナの問題はあるが．本稿の掲載時には終結していることを切に願う）．その間に専門医の更新，学位の取得，ロボット手術の経験など，レジデントの立場からは幾分時間が経ってしまったが，幸いにも各方面からのご厚意により参加資格を延期して頂き，念願のレジデントプログラムへの参加が叶った．AUAでの発表歴はあるがEAUへの参加は初めてだったため，COVID19や語学力など様々な不安を抱えつつも期待に胸を膨らませて，イタリアのミラノへと旅立った．

まず月並みだが，会場の大きさ，参加者の多さに圧倒された．世界各国から泌尿器科医が集結したマスク着用義務のない対面学会は活気に満ちていた．国境を超えたEUならではの大規模コホート研究，世界をリードするトップランナーによる教育講演やディスカッション，今後のガイドラインに直結する報告，現在行われている最先端の治験の紹介，活発な議論が交わされるAbstract Session，何が起こるか分からないスリリングなLive Surgery．どれも魅力的な企画が目白押しで大変勉強になった．実臨床で日々疑問に思っていたことが最新の知見により解決され，理解を深めることができ，3年間の延期は自分にとっては思いがけず幸運だった．

延期とならなければ発表もあったのだが，残念ながら今回の学会では演題が通らなかったため，ただ参加するだけではなく質問をすることを目標に掲げた．不慣れな英語ということもあり，日本の学会以上に予習して自分なりのプランを組み立てて臨んだ．大きな会場で世界中の泌尿器科医の前で質問することは大変緊張したが，聞くは一時の恥，聞かぬは一生の恥と言い聞かせてチャレンジできたことは満足している．これまでは日本の小さな研究会であっても萎縮していたが，今後は臆することなく積極的にチャレンジしたいと胸に誓った．

本プログラムへの参加は学会参加のみならず，同世代の泌尿器科医と交流ができたことも貴重な経験だった（写真1）．福岡大学の青柳先生，岡山大学の丸山先生とともに参加した“YUORParty”では世界中のYoung Urologistと話す機会があった．イタリア，シンガポール，南アフリカ，中国，スペイン，フランス，オーストラリア，サウジアラビアの人たちと会話を交わし，さらに帰路の空港ではカナダのUrologistと話すことができ，まさにUrologyが国内にとどまらず世界との交流ツールになった瞬間だった．

学会後の夜や最終日はイタリアでの食事，観光も楽しんだ（写真2）．ミラノの街中を歩いて散策，本格イタリアンレストランでの食事，滞在わずか数時間のヴェネツィア弾丸ツアー，San Siro StadiumでACミラン戦のサッカー観戦．寸暇を惜しんで最大限に楽しむことができた．

コロナ禍で普及したWeb会議や講演会等のおかげで，最新の知見，情報は確かに日本にいても得やすくなった．しかし海外における対面学会では，医学的知識や日本との相違のみならず，多くの貴重な体験を当初の想定を遥かに超えて得ることができた．今回の経験を今後の泌尿器科人生にぜひ繋げ，次回は現地発表をできるように精進していきたい．

末筆となるが，コロナ禍で延期を重ねても中止とせずに参加を認めて下さった日本泌尿器科学会の野々村理事長，国際委員会の先生方を始めJUA，EAUの関係者の方々，本プログラムに推薦頂きました大家教授，学会参加を快諾して下さったさいたま市立病院の医局員，参加希望にも関わらず我々の延期のために待機を余儀なくされた先生方，関係者すべての方にこの場を借りて心より感謝申し上げます．ありがとうございました．本プログラムが今後も継続し，JUA，EAU双方の発展に繋がることを祈念致します．

写真1　Resident　Party．左より筆者，青柳先生（福岡大学），丸山先生（岡山大学）

写真２　ミラノのシンボルであるドゥオーモ